豊明高が保護活動

絶滅危惧種「ナガバノイシモチソウ」

豊明市沓掛町の豊明高校が、環境省の絶滅危惧種に指定されている食虫植物「ナガバノイシモチソウ」の保護活動に力を入れている。高校のすぐ近くに自生する保護地があり、定期的に草取りや観察会を行っている。二十六日には沓掛小学校と合同で観察会を開き、高校生が小学生にナガバノイシモチソウの生態などを解説した。（坪井千隼）

ナガバノイシモチソウは熱帯起源のウツボカズラ目で、高さ十～二十㌢。花から甘酸っぱい匂いを出して昆虫をおびき寄せ、粘液で溶かして養分にする。特に赤い花は希少で、国内では豊明、豊橋市の二カ所にしか残っていない。

豊明高校は二〇〇九年から、愛知教育大の渡辺幹男教授や市文化財保護委員らが行っている保護活動に参加。二十人ほどの生徒がナガバノイシモチソウの生育の妨げになる植物の除去や、土に眠っている種子の掘り起こし作業などを手伝ってきた。

沓掛小との観察会では、四年生九十人を小学校から自生地まで案内。ナガバノイシモチソウの絵やパンフレットを使い、生態などを分かりやすく説明。わずかに開花した花を一緒に観察した。

参加した児童らは「花が虫を食べるなんてすごい」「こんな珍しい植物があるなんて」と目を輝かせていた。

豊明高三年、丸山大輝君(一心)は「高校に入るまで、地域にこんな貴重な植物があることは知らなかった。いつまでも守っていきたい」と語った。

㊤粘液で黄色いチョウを捕らえるナガバノイシモチソウ＝2010年8月撮影
㊦ナガバノイシモチソウを観察する豊明高生徒と沓掛小児童ら＝いずれも豊明市沓掛町の自生保護地で